

残留孤児をめぐって

中国「残留孤児」訴訟を支える
岡山県民の会副会長

竹内和夫

中国の東北部(旧満州)に見捨てられたまま死亡宣告をつけ、帰国後も自立援助や日本語教育も不十分なまま、老後の心配をしている中国「残留孤児」。

日本敗戦のとき幼なかつた孤児たちはいま六十歳から七十歳になっています。「さっきまで手をつないでくれていた母の手から、なぜ離されてしまったのか。やさしかった中国の養父母に会いたい、お墓におまいりしたい、なぜできないのか。日本語ができないと日本人として扱ってもらえないのは、なぜか。」

岡山市と倉敷市と総社市にいる孤児たちが日中友好協会岡山支部と出会い、いま国家賠償訴訟をおこなうとしています。つい、この夏からのことです。立派な弁護士ができました。訴訟を支える県民の会もできました。原告団をばげまして、長くなるかもしれない、このたたかいに勝利するには、県民の大きな力が必要です。孤児たちの涙と怒りの声に、一生懸命に耳をかたむけてください。

はないでしょうか。一九四一年四月に、日ソ中立条約がむすばれました。中立というのは、戦争している両方のどちらにも味方しないという約束です。

日本は、すでに前の年にドイツ・イタリアと軍事同盟をむすんでいて、ドイツがソ連との不可侵条約をやぶって

ソ連に侵入すると、日本の関東軍は大軍をソ満国境にあつめるなど、東西からソ連をはさみうちしようとなりました。これはもはや中立ではありません。また、国際条約というものも、規定による通告で破棄することができません(日米安保条約もそうです)。ソ連は一九四五年四月に日本との中立条約の不延長を通告し、八月に宣戦布告しました。軍隊は人殺し集団です。孤児支援をとおして、戦後処理の欠点を正していこうではありませんか。

ジンバブエとザンビアの国境に大きな滝がある。世界三大瀑布(他はナイヤガラ、イグアス)の一つといわれているビクトリアの滝だ。ジンバブエ側の滝の近くに、津木早朝、ホテルの庭を歩き回っている。地を切り拓いて、しゃれたホテルがいくつか建てられている。そこへ世界中から観光客がやってくる。ヨーロッパ人が多いそうだが、台湾や香港からのツアーの人たちとも一緒になったし、日本からの団体さんもつぎつぎとやってきた。

アフリカ行

ビクトリアの滝

坪井あき子

探検家リビンググストンである。一八五五年、彼はこの滝と出会って当時の英女王の名を勝手に捧げつけたのだ。そこに住んでいた人々は、昔からその滝のことを知っていたし、「雷鳴のとどろく水煙」という意味の「モシ・オア・ツンヤ」という名で親しんでいた。

私たちは、ザンビア側から滝への道歩いた。台風のあとかと思わせるように、巨木の根がむき出しになり枝がちぎれている。野生の象たちが通った跡だ。

次に国境を越えてジンバブエ側から滝を見た。十月は乾季で水量は少ないが、滝の水が水蒸気になって、そこに陽光が当たると、ふあつと大きな虹が現れる。私たちは何度も歓声をあげながら、滝と虹に見とれていた。

(詩人)



写真はビクトリアの滝

「ホラ、あそこにイボイノシシがいる」と教えてくれた。金網のフェンスの向こうに黒い巨体がじつとしていた。猿もちよろちよろしている。野生の動物たちのテリトリーをこのようにして侵していつてるんだ、と思った。蔵前仁一という人が「ゴア・ゴア・アフリカ」という本で書いている。

「この滝をヨーロッパの人で初めて見た。